西照

西照寺寺報「さいしょう」
第２８号
2011年１月６日
発行　浄土真宗本願寺派　西照寺
高岡市吉久２丁目４－40
西照寺ホームページ　nisitera.eek.jp

御正忌報恩講　勤修

左記のとおり今年度の御正忌報恩講をお勤めいたします。
お参りくださいませ。

おつとめの時間

一月十五日(土)　午後二時(逮夜)～
午後七時(初夜)～
十六日(日)　午前九時半(満日中)～

布教使　林　史樹　師　高岡市伏木　要願寺住職

西谷山　西　照　寺

親鸞聖人750回大遠忌法要　高岡教区新湊組団体参拝募集

◇ 期　　日　平成23年6月9日（木）～6月10日（金）
◇ 募集人員　３５０名
◇ 会　　費　４２,０００円（会費には五木ひろし御園座公演観劇料を含む）
◇ 宿泊ホテル　長島温泉（ホテルオリーブ）℡0594-45-1111
◇ 申込締切日　平成23年2月末日（帰敬式や大谷本廟への分骨もできます）
◇ 申込問い合せは、西照寺まで　　0766-84-0705

正信偈のはなし　第五話

普放無量　無辺光　　無礙無対光炎王
清浄　歓喜智慧光　　不断難思無称　光
超　日月光　照　塵刹　　一切群生　蒙光照

［訓読］
あまねく無量・無辺光、無碍・無対・光炎王、清浄・歓喜・智慧光、不断・難思・無称光、超日月光を放ちて塵刹を照らす。一切の群生、光照を蒙る。

阿弥陀如来の智慧の光明は、あまねくいっさいの国土(塵刹)を照らし、あらゆる人々(群生)にすくいのはたらきとして届けられている。ここではその光明のお徳を大無量寿経によって、十二種に分けて讃歎されています。

意味を申しますと、①無量光。量ることのできない光。②無辺光。際限のない光。③無碍光。なにものにもさえぎられることのない光。④無対光。くらべるもののない光。⑤炎王光。最高の輝きをもつ光。⑥清浄光。衆生のむさぼりを除くきよらかな光。⑦歓喜光。衆生のいかりを除きよろこびを与える光。⑧智慧光。衆生のまどいを除き智慧を与える光。⑨不断光。常に照らす光。⑩難思光。おもいはかることができない光。⑪無称光。説きつくすことができず、言葉もおよばない光。⑫超日月光。日月に超えすぐれた光。(浄土真宗聖典註釈版より引用)ということになります。

そしてその一一は、大無量寿経には、「無量光仏・無辺光仏・無碍光仏～」など仏であると示され、阿弥陀如来(無量寿仏)の別の呼び名であると説かれています。総じて十二光仏と表現される場合もあります。よって、十二光は阿弥陀如来と別のことではなくて体は一つである。阿弥陀如来のお徳を光として、十二の方面から見られ讃歎されているということになります。

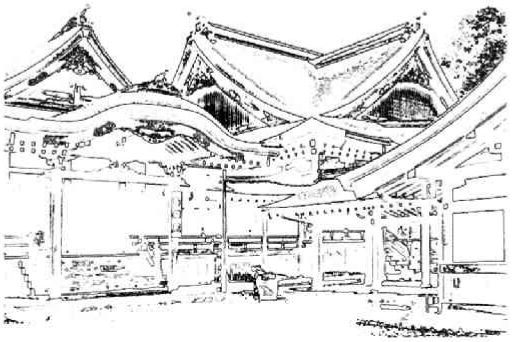
このように阿弥陀如来のすくいのはたらきを光として表現してあるわけです。

光の作用は、暗闇を照らしだし、周りを明るくすることによって今の状況を把握し、めざす方向を示してくれる。そして明るさという安心をもたらすということにあると思います。まさしく、阿弥陀如来のはたらきは、私と社会の迷い暗闇を照らしだし、真実を明らかにしてくださる。また、私と社会の向かうべき、願うべき方向を示してくださり、こころに勇気とあたたかさを、そして明るさをもたらしてく

ださるから「如来＝光」と説かれてあるのでしょう。

ですから、仏法を聞くということは、経典には「光明を聞く」という表現もありますが、光に照らし出されることです。私や社会の闇に気づき、目覚めるということがその基本にあると思います。

昭和五十年五月、私が西本願寺の勤式指導所（声明や作法、雅楽を専門に教える所）に通っていた時です。イギリスのエリザベス女王夫妻が来日をされました。その折に日本の代表的な宗教施設を訪問したいという要望があり、西本願寺にもお見えになりました。



訪問当日は声明の練習も休みとなり、皆で女王ご夫妻をお迎えすることになりました。

私は降車される御影堂の向拝（正面の入り口）でお待ちしていたので、まじかに拝見することができました。車から降りられる際に私が正面にいましたので、ニコッと微笑まれ軽く会釈をされました。法衣を着ていたので西本願寺の職員と勘違いされたのかもしれません。気品に溢れた中年の御婦人という印象でした。当時の光照門主がお出迎えになり、国宝の鴻の間や能舞台などを拝観されていかれたようです。沢山の方が出迎えておられて、テレビなどの報道陣も多く見受けられました。その当時のテレビカメラは非常に大きくて、床に置かなければならないタイプです。カメラマンの方も背広ネクタイの正装で撮影されていたのを印象深く覚えています。

その後、伊勢神宮を訪問されたそうです。翌日の新聞の第一面に「英女王ご夫妻伊勢をご訪問」の見出しで報道されていました。

本願寺新報（西本願寺の新聞）には、伊勢神宮訪問の様子を

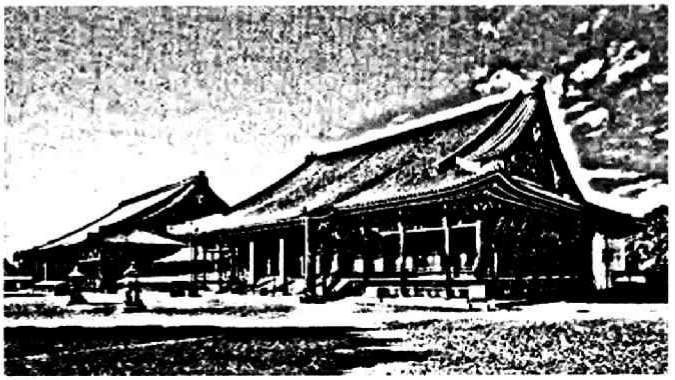
「神宮の秘書部長に案内されたご夫妻が、内玉垣南門の敷居際まで進まれたとき、ここからは、天皇・皇后陛下だけしか入れませんので、と丁重に断わられました。ご夫妻は不審に思いながら、ここでは何をお祈りなさるのですかと尋ねられますと、部長は、皇室の繁栄と国家の安全と五穀豊饒ですと説明されると、ご夫妻はさりげなくあたりを見まわしながら正殿に礼拝することもなく引き返されたといいます。」と報じていました。

エリザベス女王にとってみれば、英国王室の繁栄や英国の安泰をお祈りする信仰の対象ではありませんから、日本人が信仰する場所への敬意はあるでしょうが、礼拝の対象ではないということ（裏面に続く）

（中面からの続き）なのでしょうか。

実は、同じようなことを西本願寺でも聞かれたという話を後日耳にしました。阿弥陀堂の御本尊の前だと思いますが、「ここでは何をお祈りなさるのですか」と。

その時、直接ご案内をされていた光照門主は、「人間が祈願するのでなく、阿弥陀様が先手をかけて、十方の生きとし生けるもの（十方衆生）を必ず救うと誓われているのです。」とお話しされました。つまり、人間の願いをお祈りするのではなくて、如来の十方衆生（国や民族を超えたあらゆる人々、生あるものすべて）をすくうという誓願を聞かせていただくということなのでしょう。十方衆生の中には、エリザベス女王も入っています。そういうことも感じ取られたのでしょうか。女王ご夫妻は深々と礼をして帰って行かれたそうであります。



この話は、仏教を信仰するということの基本的な姿勢をよく表わしているように思います。

一般的に何かを信仰し、信心するということは、私たち（私と社会）の願いごとを祈願請求することだと思われています。どれが効果のある納得できる対象なのかを判断するのは私たちです。信心する主体は私たちです。そこでは、自己中心性（エゴ）に満ちた祈願請求の内容が問われることは余りありません。

ところが、仏教を信仰し、仏の教えを聞くということは、私たちが光に遇い、自らの迷い・闇に目覚めることです。信心の主体は如来（仏）の側にあります。それは、如来のはたらき、具体的には経典の言葉や如来の願いが込められた念仏をとおして、自らのエゴに閉ざされた迷いに気づかされていくことです。すべての人々がすくわれるようにという如来の願いの中に、私の願うべき方向と真にいのちが満足し感動する世界をみいだすことであります。

浄土真宗で信心という時には、如来のはたらきに心から従う（信順）、或いは頷く、気付く、目覚めるという意味で使っています。ですから、一般的な使い方と全く逆転していますが、仏教を聞くということの本来的な姿勢に根差しています。（文責　住職）